

事業仕分け（試行）を振り返って

1. 事業仕分けの総括評価について

結論から申し上げます、事業仕分けは今後とも実施する価値があると思います。

さまざまな立場の方が仕分け人選ばれていたことも良い方向に作用したと思います。仕分け人の一人が「この事業は止めてもいいのではないか」と言えば、「そんなことはない」と違う意見が出て議論となる場面もありましたが、この意見交換は事業に対する理解を深めていく上でプラスに働きました。

意見の違いは、立場や価値観の違いからくる部分もありますが、多くの場合、事業の実態をどれだけ知っているか、事業を理解するために必要な情報をどれだけ持っているかといった違いに起因しています。どの事業もそれなりの理由があって続いているので、議論を重ねるうちに理由が分かり、その意義を認めた上での議論になってくるので、意見が分かれる場合でも相手の考えも理解でき、建設的な議論になっていました。

登別市での事業仕分けは、初めての試みであり、手探りの部分も確かにありましたが、今後工夫を重ねていけば、『登別モデル』と言えるものに仕上がるように思いました。

本事業の目的は市民の目線から事業を見直すことですが、おおむね問題点は抽出されていたと感じています。

各事業にはすべて利害関係者がいて、また制度的な制約などもあり、事業仕分け結果どおりに事業を改廃することは難しいですが、少なくとも担当セクションが問題認識を持つきっかけにはなったと思います。



事業仕分けコーディネーター
室蘭工業大学大学院教授
永松 俊雄さん

2. 事業仕分けの個別事項について

(1) 評価の基本的基準

家庭の支出にも優先順位があるのと同様に、市の事業にもおのずと優先順位があります。事業の継続・廃止は、財政状況によって大きく左右されます。

また、各事業は分野ごとの政策体系の一部を形成していますが、同種の事業あるいは同様の効果をもたらす事業の有無によっても変わってきます。市の事業の中で必要性が薄い事業は、すでにこれまでの行政改革の中で整理されており、今ある事業はそれなりの理由があるものばかりです。それをあえて見直す場合には、各事業の優先順位がより重要な問題となりますので、全体像が見えない中で個別事業だけを見て評価することには、限界があります。

(2) 事業仕分けの市役所での位置付けについて

担当セクションは、事業の問題点や課題をよく知っています。事業を縮小・廃止してよいと思っている場合もあるわけですが、公の場ではどうしても事業の必要性を強く訴えざるを得ないことをあらためて感じました。

思い切った事業見直しは、当事者である市役所が言い出すと必ず反発が生じますし、困難を伴うのが通例です。それを実行するには、市民代表や第三者が入

り、事業仕分け委員会で議論することが重要なステップになると思います。

また、委員会の結論を尊重する工夫をしないと、素人の話として聞き流す関係者の方もおられると思いますので、そうなるとう単なる資料を手間暇かけて作っただけで終わる可能性もあります。

(3) 評価の傾向について

仕分け人の意見を取りまとめた感想は、仕分け人の実際の評価よりも、文章に取りまとめると全般的に厳しい評価の印象になることです。これは、各仕分け人が「事業内容のうちほとんどは良いが一つだけ見直してほしい」という場合でも、それぞれの意見を書き並べると、数多くの見直すべきところがあることになり、事業の全体的な見直しの評価に見えてしまうことが理由の一つです。

もう一つの理由は、仕分け人は、市の事業がもっと良くなるにはどうすれば良いかを提言することが役割だと考えるので、何か見直すところはないか頑張って探してしまうからです。今のままでも十分だが、もっと良くするにはと考えるわけです。結果として、すべての事業で見直しが必要という厳しい形でのとりまとめ評価になりやすいとあらためて感じました。